

遠山一行著作集

6

遠山一行著作集第6巻

昭和六十二年四月十五日印刷

昭和六十二年四月二十日発行

著者 遠山一行

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替 東京四一八〇八

電話 業務部(〇三)二六六―五一 編集部 二六六―五四―一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価 二〇〇〇円

© Kazuyuki Tōyama 1987 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

音楽時評 一九五〇年～一九七〇年 7

音楽時評 一九七一年～一九八〇年 75

音楽時評 一九八一年～一九八五年 171

*

遠山一行の仕事 6 (篠田一士) 261

批評の余白に 6 271

音楽時評執筆記録 (後藤暢子編) 283

遠山一行年譜 (後藤暢子編) 293

遠山一行著作集 第6卷

音楽時評

一九五〇年～一九七〇年

略号説明

各文末に時評の書かれた新聞名と掲載年月日を略号で示しました。

例えば、(Y・59・2・26)とあれば、その記事は、「読売新聞」の一九五九年二月二十六日号に掲載されたものです。

A―朝日新聞、M―毎日新聞、Mu―ミュージック・ウィークリー、Nk―日本経済新聞、Y―読売新聞

一九五〇年～一九六一年

「ミュージック・ウィークリー」の発刊
に際して

この一週間の楽壇は文字通り全くの無風状態であった一つの演奏会も、たった一つの作品発表会も無い。去年の暮の滅茶苦茶な音楽会の氾濫と較べれば一寸気持の悪い位で一体どんな風に考えたら良いのかしらんと戸惑いしていたら、ある人が四月になれば税金が下りますからね、と教えてくれた。たとえ話半分と聞くにもせよ、入場税というのが、リサイタルを持つという人に心理的にどれ程大きい圧迫を加えていたかが期せずして明らかになった様な気はしたのである。

ともあれその様な事情で二月の第一週は語るべき事に乏しい。その中で先ず第一に本紙の誕生を祝うのが礼儀でもあろう。勿論どんなものが出来上って行くかは全く今後の問題で、まだ第一号も見えていないうちは論じるすべもないわけだが、専門の音楽ウィークリーは確かに必要であった。

楽壇にはなるべく多くの人が発言出来る場所が要するのである。唯それだけで解決してしまいそうな詰らぬ誤解や無理解が、大切な仕事を予想外に妨げているのである。そのためには専門分野のウィークリーは何としても便利なものに相違ない。要するに本紙は、楽壇の井戸端会議が公的にはどんな風な意味を持ち得るかを無技巧に信じさせる事が出来れば良いのである。狭い楽壇では或る意味でお互の理解？ が行き届き過ぎていて、本当なら社会的な良識を以て大乗的に解決すべき事が凡て個人的な感情や面子に支配されてしまう。最近の楽壇にも広い意味の政治的問題が少くないが、本紙が斯うした問題に当って、凡ての人の「非政治」的な意見を大小に拘らず発表出来る機関になれば良いと思う。

(Mu 50・2・10)

「現代アメリカ音楽の夕」を聞いて

二月六日の月曜に日本放送協会の主催で「現代アメリカ音楽の夕」が催された。開場時間ぎりぎりに日比谷へ行くと見ると、入口に向って入場者が列を作っている。一緒に

並ぼうと思って歩いて行くと列がひどく長いことがわかった。建物の角まで行って夜暗の中に列の最後を見透しかねて戻って来たらNHKの某氏に会ったわけである。

ロイ・ハリスのシンフォニーなどをききに来る人が何人あるかしらんと、実はガラガラの公会堂を予想していた僕にとつてこれは確かに一寸した驚異であつた。勿論集つた人々はロイ・ハリスの聴衆ではないのかも知れない、ガーシュウインの映画「ラプソディ・イン・ブルー」のファンも多かつたかも知れない。けれど当日の会場や会衆の雰囲気から僕は決して失望をうけ取りはしなかつたのである。

ともあれ無料であれば現代音楽の演奏会も入るのである。アメリカの作品でなければ駄目だったかも知れないが、必ずしもそう決められぬ氣もする。歐洲の作品も、又日本の作品も同様にやつて見れば入るかもしれない。入るだろうと思いたい。少くともこれはやつて見る価値がある。有料で、大して宣伝も出来ぬ邦人作品の発表会の当日売りが最近はかなり出るそうである。各学校で現代音楽の研究會が出来つつあり、僕自身の關係している現代音楽の雑誌も結構売れるのである。NHKの宣伝力をもつてして、無料でやれば、一月一回位の邦人作品発表會が、聴衆を集め得ぬとは信ぜられぬ。そうした事のもつ意義が如何に大きいかはいうまでもない。現在の創作活動をほうっておいて音楽

文化を云々しても始まらない。邦人作品のすべてが立派なものだとは決していわないけれども、それなればこそ、なおそうした企ては是非欲しいのである。聴衆は確かに無関心でない。のみならず、その関心は毎年毎年驚くべき勢で増している。その為に、現在でもNHKが相当の労力をはらっていることは感謝すべきであるけれども、もっともつと積極的に自信をもつて大衆へ、大きくその意図を展開して行くべき時であると僕は信ずる。現代音楽が大衆化しない原因を作品の側にばかりおしつけてはならぬはずである。

(Mu 50・2・17)

病中日記

——前略——二月も末に近づいて、依然として演奏會は極めて少ない。稀にある音楽會も殆んどオペラか交響樂團の定期公演に限られていて個人のリサイタルの類は先ず皆無といつていい。中小企業の危機とは、楽壇でも同じ様に通用するものかなと考えた。ともかく、その意味では、現在立案中といわれる純音楽會の税金四割案は極めて有難い。

最近発足した議員音楽聯盟がこの点に全力を集中してくれば何よりの事であろう。

しかしながらオペラ等がそれから除外されて十割の税金をはらわねばならぬという事はやっぱり妥当ではない。最近の《カルメン》の公演を見た方は多分そう思われたことだろう。ぼろきれみたいなものだけで四幕の装置をこしらえ上げた苦肉の策は同情するが、観衆にして見ればやはりオペラというもののへの夢を裏切られた想いは強かったに相違ない。オペラの事や音楽会への希望は色々あるが、しかし何事にも経済的な問題が先立つ現状ではこれはむしろ減税後の状態を見てから意見を申しのべるべきであろう。少し話とはぶが《カルメン》の話が出たので、若干の感想をつけ加えさせて戴く。

私が見たのは松内和子さんのカルメンであったが、誰の気持も似た様なものと見えて楽壇関係の人の多くが、この有望な新人の舞台を見て来ていた。しかし松内さんのカルメンに対するその後の批評は必ずしも香ばしいものではなかった。つまりはカルメンの柄ではない上品すぎるというに尽きていた。確かにわがままお嬢さんみたいな愛くるしい肌あいが見えてしまうのはどうも仕方のない所だったろう。しかし彼女の歌も音楽的にいえば立派に筋の通ったものであって、少くも従来のカルメン歌手が、ともすればこの

役柄の演劇的な表現に重点をおきすぎて正しい音楽的発想やフレイジングに無神経であったのに比べ、彼女の歌にやはり若いゼネレーションとして共感をもったのである。いずれにせよこうした戦後派が成長した時に日本のオペラ界が一段と高い水準のものが期待されるのである。

(Mu 50・3・3)

美しさへの想像力を

先頃、年末の常として、この一年間の音楽界のベスト・スリーをえらばされたが、安心してこれとは思った作品、ないしは演奏がきわめて少なかったのはやはり寂しいことにちがいない。日本の音楽界の水準が年々急速に上って来ていることは確実なのに、私共がうける音楽的感動が、必ずしもそれに付れて増加したり、向上したりしてはいないというのはどういうことだろう。

大体、音楽界の水準が上るとはどういうことなのか、という疑問が出ることを私は想像する。たとえば、文壇の水準が上ったという風なことをいったとしたら、これは幾分

こっけいな調子に響くだろう。

音楽が他の芸術に較べて、はるかに人為的につくり上げられた自然を土台にしている以上、技術というものもつ意味も、それに比例して大きくなるのは当然だろう。スポーツの記録が年々向上してゆくように、音楽の技術も向上してゆく、ということが考えられるのも決して無理とばかりはいわれない。それどころか音楽に特有なこうした性格を、それ自体としては非常に健康な特権であるとさえ私は考える。

しかしながら、音楽はやはり芸術であってスポーツではない。スポーツには記録とか勝負とかいうものが大切な意味をもっているけれども、音楽にはそういうものはない。それなのに、ないものがあるという風に感じるような所がわれわれの間にありはしないか。記録があるとはだれも思わないが、勝負はあり、特に外国の水準に対するコンプレックスはどうやら否定出来ないようである。

われわれ「洋楽」にたずさわるものが、ヨーロッパに学ぶのは少なくとも現状ではほとんど不可欠なことである。しかしそれはただヨーロッパの水準に追いつくためであるはずはない。彼らの技術を自分のものにすることによって、よりよく發揮することの出来る大切なものの存在を自分の内部に感ずるから学ぶのである。むやみにヨーロッパの水

準や流行を追いかけたり、反対に性急な民族主義をとえたりするのは、いずれにしても自分の内よりも外に目をむけた人間のすることだろう。われわれに欠けているのはやはり徹底した個人の意識なのだとは思う。

前おきが長くなったが、今年の楽壇の出来事を思いかえして見ると、結局は外人演奏家たちの活躍が強く前面に出て来てしまうのは、残念ながら否定出来ないようである。彼らについては、日本のジャーナリズムも比較的多くの紙面を提供したこともあるから今更ここで問題にする気はないが、春に訪れた何人かの「大物」も、秋のシーズンにぎわした「小型演奏家」——とジャーナリズムはいった——たちも、皆それぞれの音楽の喜びは与えてくれたのである。日本の演奏家も、ある意味では随分高い技術を身につけたのだから、彼らの音楽のもつ楽しさについて、この辺で本心に考えてみてほしいと思う。

日本人作曲家の作品としては、ベスト・スリーにあげた矢代秋雄、三善晃両氏の作品が正統的なメテエの高さと、主体的な感動の両面で水準を抜いていると思うが、そのほかでは、芸術祭で賞をとった石井敏氏の交響的組曲《アイヌによせて》と間宮芳生氏の《混声合唱のためのコンボジション》をあげておく。前者は、K・オルフの作風をとりながら、作者の意図が理屈なしにきく人につたわるのは、

やはり作家としての腕と心構えがしっかりしているからにちがいない。後者についても、日本民謡のもつエネルギーをあれだけ筋の通った音楽的持続として構成した努力を言うのである。話題になった黛敏郎氏の《涅槃交響曲》は、大きな可能性をもった試作として見ておきたい。軽井沢の音楽祭で発表された前衛的作品の中にも良いものがあつたといわれるが、残念ながら日程の変更でできそこねた。

演奏家としては、日本に一時帰国した園田高弘氏をあげるべきだろう。そのほか宗志津江、大橋国一、四家文子氏らが注目すべき仕事をした。しかし何といってもドビュッシーのオペラ《ペレアスとメリザント》の好演は特記さるべきで、二人のフランス人音楽家の協力によって、これだけの舞台をつくり出すことが出来たという事実の意味を考えたい。ヤンソンスに指揮された東響の場合も同様だが、つい昨日きいたイブナール女史のリサイタルで、岩淵竜太郎氏らのプロ・ムジカ四重奏団が協演したショーンンの《コンセルト》も、この種の室内楽の演奏としてきわめてすぐれた水準にあつたと思う。こうしてみてもわれわれに足りないのは必ずしもメカニクな技術ではない。音楽の美しさに対する想像力こそが問題なのである。

(Y 58・12・25)

まずオペラ劇場を

イタリア歌劇団の東京における公演も、五つの演目を一通り出し終って、近く舞台を大阪に移そうとしているが、まず文句なしの大成功といわなければならないだろう。初日のデル・モナコのアテロに圧倒された聴衆も、《愛の妙薬》におけるタリアビーニ、《椿姫》のトゥッチ、さらにシミオナート以下、豪華な顔ぶれをそろえた《カルメン》を見るにいたって、オペラを見る楽しさが、こんなにも豊かで、多彩なものであつたことに驚いているにちがいない。個々の演目についての「批評」はもうかなり出たことでもあるし、この時評では、一歩しりぞいて、彼等の残した仕事から、われわれのオペラ運動に対する教訓をひき出して見るのが大切なだろうが、そういうことになる、たちまち重要問題が山積して手のつけようがない、という風に思えてくることは事実なのである。

歴史の浅いわが国のオペラ運動があらゆる点で不十分な段階にあることはやむを得ないが、当事者たちが、それを

意識した上で努力して相当なスピードで進歩向上していることもまた間違いない事実なのだから、もうしばらく時をかす気持が必要なのだろう。

それよりも、私としては、この機会に、出来るだけ多くの人々に、オペラというものが音楽の世界でどんな意味をもっているかについて知っていただきたいと思う。一口に言えば、オペラとは、ヨーロッパの都会生活者にとって何よりも日常的な楽しみなのである。決して演奏会のような固くるしいものではない。われわれの例で言えば、むしろ映画やプロ野球にちかい。特別の映画ファンでなくとも時折り映画を見たくなくて今日は何をやっているのだろうと新聞の案内欄で調べてみる。見たいフィルムがあるときもあれば、何でもいいから見ようという風な映画見物もある。映画を見る楽しさというものが、生活の中にとけ込んでいる。ヨーロッパではオペラはかつてそういう風な存在であった。現在それが大きく変化して、映画やテレビがそれに代ってゆくとしても、オペラがかつてそうであった根本の性格は容易にくずれるものではない。

ヨーロッパ人にとって、音楽をきくということはまずもってオペラをきくことであり、そして、ほとんどすべての分野の音楽家がオペラ劇場との関連において、生活を立てているといっても大して誇張にはならないはずである。わ

が国の音楽に欠けているものが、実はどれだけわれわれのオペラ運動の貧弱さに由来しているか。想像をはるかに越えたものがあると私は思う。とくにわが国に本当の聴衆が生れるためにオペラがどれだけ大きな役割を果たすか。それはどれほど強く言っても言いすぎることはないだろう。

オペラがこのようなものであるために、どうしても一度かいたように、国立オペラの組織をつくるより他ない。しかるべき劇場で、一定のプランに従ったオペラ公演が、シーズンの間中、休みなく行なわれている状態。これが民間企業として経済的に成立しないのは全世界の実例で明らかなことだ。

そして、それに関連して現在問題となっている国立劇場にもはつきりとした意見を申しのべたい。この方は、もうはじまりかかっているのだからぐずぐずはしてはられないのである。

新しい国立劇場はぜひオペラ劇場としてつくっていただきたい。国立劇場だから日本古来の芸術を重んずべきだという形式論ないし面子の問題はひっこめていただきたい。国立オペラに相当すべき国立歌舞伎・国立能の組織をつくるというなら別として、少なくとも劇場に關していえば歌舞伎や能を上演する場所はちゃんとある。オペラをやる場所